

里山の宝再発見と地域づくり

—地元から学ぶ、暮らしと文化を伝承する、村ぐるみ活動のすすめ—

NPO 法人里の自然文化共育研究所・山形大学大学連携推進室

出川 真也

1、里の自然とふるさと文化のかかわり—地域の暮らしに根ざすことの重要性—

- ・里の人々が自然とともに織りなしてきた暮らしの文化—知恵と技術—
- ・基盤となっているのは
 - 自然環境（里山、川、農業）
 - 生活文化（郷土料理、もの作り、住まい、伝統行事・年中行事）

→里地里山の自然や文化は人々の手が継続的に入り日々の営みがなされる中で保全されている。

2、地元学のすすめ—里の暮らしの現状はどうなっている？—地元学ぶ「地元学」—

- ・地域集落の自然環境と生活文化の現状を把握
- ・地域集落の人々の意識を把握
 - ポイント
 - ・地域の住民自らがまず学習し把握することが次への行動へとつながる。
 - ・その中で外部者を「活用」することも有効

→地元学のすすめ

- ・山村の何気ない素材に価値を見出し、力づける。
- ・地域づくり計画は住民が行う。（アイデア出し→立案→計画→実施体制作り→実施）

3、地元学によって見えてきたもの

- ・住民による地域の再発見

→山村住民は「何もない村」と愚痴をいいがち。外部者の目線の違いを利用して、山村の自然や文化を住民自らが調べ、住民が地域の価値を再発見するプロセスを重視。

- ・地域内コミュニケーションの活性化

→次のステップの具体的行動を起こすための基盤となる

- ・特定の領域だけでなく、互いが互いに支えあうものとして、数多くの里の素材が学習の対象としていくこと。

4、里地里山の地域資源を活用した活動の展開—角川里の自然環境学校の事例から—

- ・里の住民が先生役
- ・山、川、食、農、ものづくり、民話など地域資源や生活文化が学習プログラム
- ・ツーリズム開発、産品開発へ

5、今後の展開と課題、広域連携への模索

- ・地域集落を基本単位とした里作り活動を地域力へ。
- ・多主体連携、広域連携へ、「森里川海共育プラン」—NPO 法人里の自然文化共育研究所—の設置
- ・大学コンソーシアムやまがた「最上川学」を基盤とした大学連携や若者への発信活動